

15

F-11

2冊

490
05-3

No. 3220

四〇一五



富士川文庫

786

和蘭醫話序

漢國のひととは、其奴隸なる朝鮮國をも、微
發明も得ざる。とがまことつてあよびず吾
皇國より中古來醫小役奉せらるゝがづれ乃
人も素難能え。湯著るる冊、套架充棟、數
千萬又あらずもう。余や。年々そぞちばくとけりて
医書と讀み、驚く漢後が信して、其よ愚惑し
欺く所。今ふ三十年所、一日も香白氏う解

體新書と圖。後宇明卿氏が内科撰要ある。
 櫻子喚氏が著書をよみこにて其論説の新
 奇かくふと異る。大小兼ざひと並び爾れ
 まれて西洋の諸醫典と譯せるものの數本と圖し頗
 其大抵を知り同好の士と戮餘の屍と剥剝し諸
 畢數十品と解臓して内景と研精するに西洋書の
 説奇一をよみて差しあり嚮小漢人内景の説よ甚もに
 もの忽然と醒覺し一時よ舊習と脱するを得

愉快つゝぞかゞ三先生の偉功豈教せざりや
 繁漢人行物ぞかくも歴其不習と傳る。金曾子は罪
 人をもべし其臟府とよぶ。自親しく観たるがて經絡
 を視く。手自解きたるごとく声よ吠て空く鳴ずる臓
 臓物つゝぞかゞ謝在杭もあひて面土愧ざらんや顧い
 傷寒論の一書のを論議ふ及ばず臓絡よりげ唯其
 直よ視聽するものとして脈動々數々諸疾と治する實事
 のをもつとの如きれども其作金畠中藏肘后手

金外其室下巢許徐王孫滑諸張李朱之書至焉此
臟絡謬誤と淘汰せんと思ひ太任果ゆ。後世余意と同くせん
人と俟の。今や塾生の向よ答詰と筆記せると上木せんと請
う。余詎拒かん。ほ詰りどれすく人あつて取る。う。疾醫り
道はより大よ興起もあてん。刮目されと期瑣々細々の小本石東海と
填めん。余特よこれが精衛をもむふ。

享和三年癸亥歲

和泉萬町伏屋素狄識

目次

心の臟の話

診脉の話附泻血の話

神經の話

眼の肝臟小關かゝの話

耳の鼓膜の話

腎臓精汁とえどくの話

精囊の話

卵巣の話

膀胱出納口の話

轉脬の話

膽の用うふの話

附黃疽の話

大機怪児の話

健胃劑の話

蟲腸の話

下卷 目次

筋の話

猶林九臯小聽の話

諸器の話

藥製の話

藥品彼此有無の話

附地五方差ひうの話

胃中燥屎と辯ずるの話

針灸穴處の話

西洋の說教學歎の話

閑臓諸書の話

華佗割心の話 附ケーブルイキの語

阿仙藥の話

半夏厚樸湯の話

漢國の人醫才云々の話

うさご雜話

仲景氏より拘泥するとの話

和蘭醫話目録 畢

凡例

横周池高道等我

琴坂先生より問ひ、先生詳しく述べ

トヨー語と筆記したるもの許多り、醫話とちつて書の名と次の大
和蘭醫話も其中のひとつである。余かハ頗漢語ふ近一きつあ

先生嘗てソラハ筆記俗文の類をとめて讀み易く解へやまと
簡要とせよとある。又ふ等令と奉じて俗耳目にすとぞ教へ
簡要とせよとある。又ふ等令と奉じて俗耳目にすとぞ教へ

簡要とせよとある。又ふ等令と奉じて俗耳目にすとぞ教へ
冗長を去り有る人頗難と承うて居る。且和蘭醫話より書

三編有今刊るものハ其の偏かう一二の偏ハ後、きて刻す
爲めよりせうとがふを咎ひざつて又 先生著述和蘭簡
方今校えあらず不日に梓よとまくし



和蘭醫話

琴坂先生口授

心法臓乃話

門人 橫周筆記

一心祐臓もハ人一身祐主宰にてこそ爲くの意識動化する
此臓より生まるきのからく儒佛其外諸道とも心法心學より善
心西心をもどすらぐく心よりあだくぬはなれねよ夙夜勤め
平日祐醫譚より多く承ひはされど相違ひ申みむよ是れ以て
かく事に在り度々やむくうちに示一を承度矣
汝等心もより不傷もはどのほどと思ひ度ゆる事のほど
あくまじ今西洋の説且巫術の事たゞ入射一心之鏡乃

車乃血氣集る處の會所役同あくへ動脈も常ひ動を居る
血の通る筋管に心乃脈より血を生て諸経を廻其廻り終
筋管至る細き管乃端より又それよ深くそつて端又端等
はとて紙あはせある細き管入心而内此管の通す筋を血脉也
申以是ハ動脈と呼ひ動と不外此又裏面ハ處々辨らるる
あきハ心乃脈(運行する血を引く處を指す)と云ふてはいわむ
細き處あるも此無ハ又細き筋を細ニシム辨は難易と云ふ
余一云此あも觀は理もゆゑ度事に勸脈が筋筋動と筋
あきが才にて復活。既教も候がひきの天地の橐籥も心乃
脈の初とある其動もと向ふ此すらりあらず固でも固ぐく動とやら
れ

尤同ド血の通す筋を寸口と大澤とみて動の小差ハ又之くとも
大抵ハ同ド事やう熱の表裏によく差くと事准もあたる事に
心脈一身の主宰ある意識動作あれよ生まざのなれば其動りを
意ふと動と動と静をとんと意へと擇たゞと通理あるあんと意へ
いう様に静をとんと欲ても脉の動を熱によく滑大數急。又大数
以てもあくべ動ハ天地の氣と應する事かく一邪氣と云ふ冒犯され
るをひく心よたとく事を脈へりてりすもあくべ
漢人の心乃言外用かと意の事(係る心の脈ハ人軀の血也)居す
中より事とあくべ漢人も仲景氏ハ心下痞心下硬心中痛

をもと倫セ一唯胸乃部位を擧へたる也俗よりすも胸つゝに人又
をもとあゝ世人などりふ皆瘧よりけむるを難と相思候もすもあつて

診脈の話

一扁鵲垣の一方を視て盡く五臟癥結をもと特よ診脈を以て名す
了のこそ史の文よりえりケれり術西洋よりもよきいふ
左極の右者流のゆゑと事一切承石門以漢よも僧智縁易思蘭休咎を脈又
りふ太素脉もと日者の事より醫又取る處もざら傷此太素脉一
法あり吾 圓りよきこれを教ふをやうと佗日承傳へる事以ね更素より
多くハ脈を修むる事が即垣の一方をもとなべて 脈を修むやまんと
ある特よ垣の一方をもと以て名とするよ邪垣ハすの謂あり

機膜を幕とりて之をあくとれいづき外より候ひて其病もとあらを志
るをもべ一西洋よもすのりあくよみ脉動を候むる事あり其它声色
外候みる事もと事教矣ア「ブランカール」書社名より支那の人を
血脉を腕みて約一審にてそれよく徳病を瘻とある蘭人も称譽をと
教客よなうあるみ此腕肘寸口天澤を二指を以て诊一病をもと事甚難
矣事よなう傷寒論中より小所乃徳病之事を大精しく考てみ候以
徳病の套語みのこを慣の術をうけねねれ注意あくべく聲色脉動達
も良醫の名を乞ふ人を漸忽せび至く慎くと大切よ從へたる事也案内
通より西洋を血乃動如何を候診して孰乃唐量を察す人乃生氣あくみ
あくもりべ一脉と死生の大關係をうり
診脉をもと醫がゆき

珍一了つ全く是経せざるを病瘍俗流の人を捷経も乃名醫かう
などと答へり信どもあらず卓老ハ不肯卓老ハ不肯另より此寸口
乃脈の動往來をも眞ろがをまべ知る西洋の法それく乃毫と用ひて
鰐鱉魚を以て觀る時を浮沉遲數滑滯全く同みて就く観らるゝ事
て指みく接あせば脉の色理脈下に於て見ゆる人も同じたる相を
以せ醫角脉を冷る脉を視る事は脉の色理を研究せばして脉の事
も遠慮なう医角ハ脉象もり事はく脉の色理體の事を考究と
之は是處なうに事はく和氣術法を以て後又入ひても鬼面より先入
をくことなくどや足りよも院氣術法を以て後又入ひても鬼面より先入
もとたうて再びけ間より頑うひ精氣一後研究丸を以ひて右氣法の
うとも店も店もてと復

思ひかよ何時かうも即ち健安易よ致ひて入一後ひ足下熱をふせうも
志の厚こと醫角家ほど通ひ枕心の胃虛はひ水出でき以不傷氣と悟
秘一か車掌の車掌の車掌の車掌の車掌の車掌の車掌の車掌の車
なうわをうそくも筋も少く五指さど屈伸とする用の物かうとくに
くとも同く大筋とくじ化筋より絡の字路のまもれ傷ハ各のまく筋
ひもすも店も店もてと復

心の臟より血の生納の事一圓滿をれが血ちにあく事ひくひあき
截り引咎に立向の逆よ成る形をもと併せと併せと併せと併せの益
もなれたりが精々氣筋どりかとすり西洋顯微鏡を以て核の附
も身に入りてあよび解毒の事は後後多く日本の方々細き水色と

人准ドリ大抵をあらざ事もあらずて心絶ドリ由トたる法方へ配
送す血の後路をあらざ事ある事もあらせ一後あらぐ先心の筋血液
乃集會所出納の處と元側を居て並立が初より第一儀と成る
てより其血の効くが脉体を以て居る所に並立せり
血の量數の車血と微液と人身のかけ因三分一あらゆ事アラニカ
ルツの徑より血征の病人血を以ての五分あらハ下血又七分ほど
仰山よりあら化血の三歩を以て水液も交て歩事なれど大抵西
洋乃後より量壽されバ吾京汗又汗又汗と水足で足
人身計かけ因十六七から通計のうち扇と龜とを合すが血の外
教ふる漢人勲もとれど後房の外因を以て量圓をりすけ血の量の

丸をいもも唇舟の魚なりテ 国筋取放量捕すを トヤリ
外より却て血の通筋と色路、刺と事にせ間ニ移計す血をと
3拂を看たる如く、准肉中、うちあみてそれよりか一出血さする者
計ふく肉と突と刺され、吸を共ひ血吸出しこなう得ふま
らず肉中みハ右の血筋の端を細く細と复數千百あるものと見ゆ
偶中やもく微トヘモキ血を左筋の筋り、亦もまた拂たゞ病氣
アモも偶もとアド先を体乃事ハ姑妄と西洋得血清ハノ澤夷中
嚙脣よりあく一身十五六處刺血をあらす、アモク刺は畢竟ハ血
を深とみかう右ノ刺も愈々見よ看入せらるゝを刺す
事かうれハ故ニ蓋中、腐敗の液混清、あらば一所又刺して其敗血

液を洩らす葉子法と、口づ土小地あめいハ海辺ふくばいト病氣も。ばいとモ死乃方言はシヒ戸厥蕙肩をモ核のまひとけ病の歎や。時其あうは土人小刀代もと唇の裏面をほき破り血堂と呼。船ひよ。謂花の醫西平井道長より西洋の法と似た事にて肉唇乃血拔うひよハ舌下の筋肋ある血脉を刺して血を多くをかす。西洋傳血法甚性と深と法あり慢と浮血を多くあらず血の量多。病氣輕重にはての量の傳量ありと説みせす。けも法滅氣を量。病氣輕重に浮血の事とも波及して郭右陶が沙脹玉衡書など車代あらか序よ深血の事とも波及して郭右陶が沙脹玉衡書など乃針法もあらかじ事より且彼書一篇中序の後も手に足傷無。

書はての序と入一後は此書に限らず近世の漢人著作の醫西もあをもと取る右よりすく序論の論議ある。之に酒とて酒浸てる。行為益あて傳血致し。かどりん人をめに酒と信。一月。飲食の耗減。之ハ各用とあるとあとが其あら。各害減かずられを敗。波とヤク。それが血中。交へい。と痛を釀。かづらゆ。とそれを血を通。復色浴みて深血して西物と。と。薬する。と皮膚で毛髪と。西物と良血。外側。廻る。あらわな。バ血と。あらわ。良血。波。かづ。西物と。方多く傳する。かづ。敗西のあらわ。精良のあらわ。かづ。利。個の疾痛を金。其斧。これ。み准。波。かづ。あ。と。毛髪。肥へ。毛髪。人を傳血と。事あり。犯人の血と。瘡人。移す。瘦人。を肥さ。め血と。益。血有餘。血不足。

あむろの發汗術ある後せりと行ひて來りて是ひも解血の奇効術多
あり後汗と解産一と解ひをかくと解説一至多あらへ血のりと解説をとすと
あ)後汗と解産一と解ひ

神經の話

一 神經と事無く事無く事無く事度

あきハ蘭人世效と名はけ其大に至るを以テ漢字は譯く神經
あふく漢人乃心脳の役目を此神經こそ勤め之が如所ハ頭の裏
脳臍より始く脊椎の骨の間々へ出づる根元の起處をもくらう太さきの
あく推骨筋筋肉も太く走り向て中空
向後蘭人「ホフヒ」と書く事無く事度と解説をとる端々
向後と名はり

血脈圓指又細くかうて數百筋指の端孔眼のうちにも在る所
あ肉もくへあてんの筋もまく附着し、其事の
細き絡み徳能大小の筋ももはくひからて肉の事熱痛痒を知
らあむろたゞきてじ腦筋ももと意識動作記憶筋生もにと寧
まう筋なぞ小兒事、諸事も筋ももと筋ももと贅せん筋一體
覺を用筋ももと筋ももと筋ももと筋也よ筋也よ筋也よ筋也よ筋
筋止まず筋ももと筋ももと筋也よ筋也よ筋也よ筋也よ筋也よ筋
筋事ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋
乃後周也筋ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋ももと筋

先君の事記

眼乃肝膽及腎の話

一 眼同を肝の筋と係る事法より從う故のこれなら可也

あくことなり

其説原漢人由出をもなれば漢人こそ多能者をもて是が後成く
牽強せしわゆる今眼同筋接し於て胞臍のすゝめ生々补綱
乃ら此の所とこそよそれ肝の筋腎の筋一細筋も傍に繁るものを
觀る呪や多能ハ腎白處と肺尖部五色一體するあり捧股とごと
ほどの運送を知る所もよむれどせぬ遂にとめてう夷むるや
達人経絡もすの十に經とくじく傳へりと 菩國ともさへ云ふ

西洋にも類のあら陽器へ達するの經あるまじか後もあれど不
偽いまと至るをもつて必ず性をもつて後からも世人の從とて筋をも
達ひやあまても後小あまもうにあくと自あぐり今りと峰くやの
事記の事のこゆ入

耳の鼓膜の話

一 耳ハ臍より開きより後も次第に通ひ耳又耳中も入遂不
ハ筋の内も入り事体の事比々いひあひいひの事も

あれ又眼の肝膽及腎と同後よりて一絶例乃種子也之は耳
ハ虚すあると凡例を以居て是は人も耳虚すか熱して耳
を用ひて觀るたる方の一方で一腰脛筋アヒルアヒル西洋にて鼓

腎臓精汁を
のむ

一腎虚あるひハ腎水不足かどぬゝやあハせんと腎水とやらを
肺金肝木をさげてのりひそむ事御とくせんとて取月水をあよ精
汁とくらゆもまきのを角回る様ざくへつけ膏肓をもひがと
もの腰痛を議へがまうとあくと仰て承知服膺仕居復ふに

能こう再向せられける内裏を御用施てく千古の疑惑、聯の解
ナヨ後より、寶見え活トテ、腎ハ脊脅ノあすうに候て、たる
あるわたくシの董吻乃童もまつた事トビツ、肾とらひ、一方を令
門ヒリミド誰が掌けむかふりやされをりかも、一足痛かず、

らの後後とて坐す。肾へ便り生氣一石をかゝ人乃飲食胃に入り
坐す。腸を通る間より腸み附す。薄膜とよもぎに筋毛の網絡を有す。
それより液体をも。もは溼濡。糞もあつて肛門よりもなう其液体。膜の
空せ根の受け石を「傑児」科臼と名づけ。それより動血。二脚の裏
だんくよ。登るなどバ排水の水をせう。骨盆骨はあつて血管入にて血を周
流。動脈中より生じて臍より入たる腎は其血中の味の酸と分る水
液。其筋はとも血と血脉中へ居り心絶へ入右邊氣ある。腎
より出其筋はとも血脉中へ居り心絶へ入右邊氣ある。腎
より出其筋はとも血脉中へ居り心絶へ入右邊氣ある。腎
其筋の端たが二筋入あり膀胱を截され肉を引きばれ。二
筋の筋の孔をも。膀胱水一つもはまねばそれより陰茎の中漏れ

小臍と右ハ左右とも臍脇の肩とがれて左は大抵とて刀互にわざの
あいのうハ臍と同様に世間の色をうけ小臍も脇あくと就中臍の申へ入る
臍の血と鹹水とをはつきり筋肉とともに助ける役同あらずは後もある
大概を活らぬまゝでも臍脇の小便ひとと通り片身どう筋肉を
あつ難むきをかゝるからぬる所會はまづ此度の活を心臍とうけた
えども第一此臍脇の官能ハ其筋肉の易ひ傷つくなりと因する故
得遠と一附又次釋へて舊習と道き立ての大捷経を此一條と書生

草木根之圓敷等を以て其一體の事もとては身外の事と眼を開き
魁よりうみ車に獸類あくも其驗徴を觀る。先膀胱の小水を搾り後
出一膀胱を手裏まで延さず腎の脇(脇)又は墨汁けにて
入り腎瘻(よのど)をけりたる事少時後成ぬとても既に腎瘻を搾り
あむきバ墨汁をもとてハ腎中み跡(跡)右の「ツツ」(とく)後經(後經)に澄す
水通す(水通す)。七八寸あり(寒)乃緒(緒)もあく(修)
澄する水のりて通じ(通じ)遠(遠)く(遠)く(遠)く(遠)く
膀胱(膀胱)一(一)も(も)張(張)た(た)れを(を)搾(搾)り(り)あむき(あむき)此水陰茎(陰茎)下(下)潤(潤)する
なり。此法生(生)て腎(腎)墨汁(墨汁)を(を)吹(吹)く(く)後(後)此(此)ひの(ひの)ゆ(ゆ)も(も)同(同)じ(じ)
けり。墨汁(墨汁)の(の)通(通)じ(じ)は(は)血(血)も(も)澄(澄)す。白汗(白汗)ハ小便(小便)かうと(と)リ事(事)也(也)。

既(既)に右(右)驗(驗)を試(試)観(観)る。右の腎(腎)ハ外(外)も肉(肉)も無(無)けゆく(ゆく)是(是)より左(左)の
それを截(截)つて(て)肉(肉)面(面)の(の)脛(脛)く(く)浦(浦)を(を)も(も)あ(あ)て(て)搾(搾)り(り)て(て)腎(腎)
小便(小便)ノ役(役)なる事(事)掲(掲)げ(げ)れよ(れよ)漢(漢)人(人)教(教)百(百)員(員)腎(腎)精(精)汁(汁)を(を)醸(醸)く(く)成(成)る職(職)と(と)て(て)渴(渴)
達(達)ひ(ひ)く(く)陽(陽)子(子)の(の)衰(衰)。右(右)腎(腎)虛(虛)ま(ま)だ(だ)ひ(ひ)く(く)腎(腎)を(を)補(補)ふ(ふ)く(く)と(と)て(て)名(名)付(付)腎(腎)を(を)引(引)き
母(母)と(と)れバ(ト)陽(陽)事(事)も(も)盛(盛)ん(ん)ま(ま)だ(だ)の(の)お(お)復(復)を(を)費(費)す(す)事(事)氣(氣)の(の)毒(毒)を(を)止(止)す(す)あ(あ)な(な)作(作)
金(金)器(器)カ(カ)ム在(在)腎(腎)氣(氣)丸(丸)の(の)事(事)近(近)世(世)東(東)洞(洞)先生(先生)なる人(人)從(從)事(事)と(と)て(て)水(水)色(色)を(を)利(利)する
能(能)かう(かう)といひ(い)ハ前(前)賢(賢)あ(あ)る(る)の(の)言(言)め(め)ぬ(ぬ)て(て)疫(疫)醫(醫)乃(乃)と(と)て(て)唱(唱)起(起)せ(せ)古(古)醫(醫)
流(流)なる威(威)斯(斯)先生(先生)を(を)世(世)斯(斯)解(解)脫(脱)乃(乃)醫(醫)又(又)益(益)あ(あ)る(る)事(事)
千載(千載)社(社)生(生)と(と)感(感)かう(か)う先生(先生)不(不)協(協)べ(べ)此(此)言(言)想(想)と(と)て(て)路(路)ハ(ハ)地(地)也(也)追(追)頭(頭)あ(あ)べ(べ)
後(後)先(先)の(の)事(事)と(と)り(り)て(て)今(今)の(の)事(事)と(と)て(て)是(是)下(下)異(異)く(く)も(も)け(け)二(二)種(種)を(を)記(記)し(し)ゆ(ゆ)

漢人著書中。腎臟官能のとあるよ。欺きぬれ。必要ひあへ。ことし腎
虚乃名。ひまば。小水不利。とか。夜半忽論。と。少。あへ。一。腎門。由。鹹液。淹
通。腐敗。と。車。ヨ。西洋。腎痛。とり。金屬。腎着。病。と。腰。腰
あり。重。車。千錢。を。帶。う。が。か。と。此。腎着。の。名。腎。重。丸。の。症。と。因
く。水。を。う。ぐ。た。もの。と。是。ゆ。二。病。とも。み。茯苓。を。水。氣。を。驅。也。西
洋。み。茯苓。を。用。る。事。は。あ。ざ。ん。や。惜。む。ア。蘭。の。司。ニ。ギ。」。も。ア。人。醫。を
ま。す。づ。が。ま。あ。迎。年。あ。那。よ。う。す。み。お。り。事。あ。ま。書。に。と。う。其。人。其。人
お。教。い。た。の。う。荷。浦。も。賈。と。う。て。こ。そ。う。た。も。ア。後。彼。土。の。官。醫。と。お
も。る。と。く。渠。お。じ。茯苓。の。効。能。を。試。驗。せ。ぎ。其。化。我。き。と。漢。と。今
く。用。る。茶。代。も。の。汗。被。た。ふ。書。記。お。そ。る。數。十。種。あ。彼。土。も。追。く。用。て

驗。ある。車。或。あ。ば。大。よ。支。那。茶。な。と。繩。を。く。る。す。ア。乾。中。茯。苓。之。性。
鎮。重。た。る。あ。る。と。俗。よ。り。掌。中。茶。を。ま。せ。く。持。ま。る。あ。る。質。ふ。く。能。下。降。
さて。其。能。水。多。を。吸。ひ。引。く。外。よ。う。あ。わ。ド。あ。く。て。水。あ。れ。ハ。審。に。和。
入。き。能。ア。モ。支。那。と。ア。か。乃。ど。く。水。多。ア。喫。食。且。烹。質。鎮。降。ふ。く。速。又
下。降。せ。ど。利。の。切。あ。も。宣。な。く。ふ。け。一。茶。セ。性。賤。の。忌。理。を。話。を。成。ア。て。能。
而。乃。能。を。研。究。ア。シ。ア。モ。支。那。茶。能。の。車。ハ。後。日。實。活。ア。今。日。ハ。先。焚。靈。一。茶
を。活。ア。モ。二。偶。モ。及。ア。モ。三。茶。能。モ。有。ア。モ。ア。ト。ア。

精囊社話

一。腎。ハ。小。水。の。源。今。所。な。ま。事。篤。と。尿。申。修。精。計。釀。一。茶。能。モ。有。ア。モ。ア。ト。ア。

八試もよみかまく作

卵巢言話

一 卵巢と云ふ婦人多有れありひく其卵を人と觀る多き事也。然より男精於
子母の用に多有る事也。

男精母血皆率一毫人種々又鑿金後少しくとも一定論も無く將女屍を開
解する事也。又之をあへせらるゝ處甚也。然て是處を以て思考わむ者か
此卵巢と云ふ事也。固うの物もしくは官のとも色々有り。然て其形容ハ
解体新書などれも一毫も通す。やうひ世うも成年化記載いたるも大要畢
精の如く之を解す。又之をハ承豆ぐらカの左方太小ナニモヨリ全室
道又三十字もあらず。然て卵を裏面にゆゑ名泉の名あり。卵右の

ごくちひきにあたるも其皮又厚又血絡も眞つてあり。皮と皮胞衣とが
うの事也。巢乃下房よりかうん人乳痕の如き左方もある。是處若
くそれより卵生しけれん。痕乃入る様の處卵の感し出でにて半は男子情
感。又附着する處は其氣分官也。喇叭後(後)印第ム。左
邊をかけ付せるも情感トテ彼執アラム。卵の卵右の筋け周う感ト軽ヒ
出づれば喇叭官の端又在化又多。あり指と度け。力(力)の度の筋け周う感ト軽ヒ
通す。又宮筋(筋)の筋通す。筋(筋)小豆を通す。右と左とよもよも又
左えあてられバ。小豆(又宮)はく入り。左右もとに同じく。又子宮内に
有るに左右もけ。敷引筋とよもよも子宮の中をハ御く。蓋三一個を容る
ほどの大きさ。又作卵納の後。又子宮口閉塞。卵ハ母の乳血を容る

是とやくまひ太さく成るに後ひくみ實も御くみ接うゆく體す。臉毛おほのあも
至る世うく彼又は實傳達の沿方を傷。卵の外皮胞衣そらひめいをかみ
龍衣りゆういノ膜もくあ。

至る年八九月よりれハ胎なま又大きに大き大きに胎向わき周圍まわりもどもまくく小頭
さくさく。月傍つきわく膜裂まきはきけふ宮口みやくち開ひらく産うぶく産うぶく嘔うひが
あくあくかうさて道人どうじんも吾國ごく人じんり産母さんぼの初生はじなの乳うけ毒どくをくく絞しゆす。素す
地毒じどくとくまの即ち能のうあき遣たぐの巧こうかう生なま児こど胎なま中なか乳う摩まかくや
ままとも賜まつ中なか敗液ひえき穢物えいぶつああ母おの毒どく乳うを呑のまま其その種たね乳う汁じを吐ぬまま
下げきもうがう穢物えいぶつのああトト終おの比ひ毒どく乳う汁じを吐ぬまま
竹造たけぞうにうかくうかくかくかく自己の薦すすきもも天あま作つく剤ざいを終おまま

をを一一も筋すじああすや胎なま又また一條じょう共そなああししを流ながしし胎なまの血け
後ち多たく一一席せきももああすががくく天あま機きを流ながらら血けをああすすれれああ
ねねどどももむむれれとと熟じ活かくく。

膀胱ぼうう出で納なよよももににああるる活か

高たか膀ぼう胱う又また有あててトト宣せん無む一一といい少すくな便べんハハ太おお小こ膀ぼう胱う園えん門もんによよ別べつ

ああくく膀ぼう胱うへへ達入だつにゅうとと車くるま法ほうらら又また通とおドド舉あ手て古こ醫い之の。

くくそそれれをを渴うせせ止ますすハハ故ゆゑああるるみみややりりざざくくなない

其そ下くだの古こ賢けんもも古こ賢けんハハ肉にく累るいの事ことみみづづててハハ其そ古こ賢けん也や。其そ古こ賢けん也や不ふ傷きずがが世よ言こと篤だつ了り也や過すぎ激きよく也や其そ其そ古こ賢けん也や。其そ古こ賢けん也や不ふ論ろん後ち取とてて事ことああとと本もとのの事ことはは漢かん人じんも素そ難むず中なか易やす事こと。

そりよあまを乞う。角弓情劣うる事。或聖人の言ふ棄ら一人身を屠る事。不仁なうとつよ持しく因まつてのを空論。とく事多く修素難あり。而の肉景皆外と察。もと臍説のと也古聖と云とも皮外と肉系を摸索。と
考。事ハたぬ事決定也。まよ生れもす鳥死をあんやと宣とあ達を放。又嘗と宣ひ。幸えても古聖人あめに。考め。考耳。事
たう。それと能あもヤセ。がく。咽の一方よ。洞視。と。古史家。文華辟諭。と。矣。強。取の聲。よ。あく。感。て。其。不。仁。は。罰。剥。せ。ぬ。た。バ。素。難。の。述。者。ハ。不。仁。の。魁。首。み。や。れ。と。る。軀。を。解。纏。も。と。不。仁。と。い。と。生。ま。と。る。人の。筋。脉。を。不。も。せ。ぬ。ス。レ。モ。う。か。と。り。病。痛。を。療。さ。と。不。仁。な。う。と。あ。う。た。る。ハ。行。よ。禱。も。不。通。の。儀。

何卒一二の戒あきく寔詠。信犯乃活め。又周よ焉。と研究致。爰。されば。仁の端。も。左。足。下。ひ。と。與。共。が。個。と。ハ。穢。あ。と。と。か。く。と。死。あ。憎。ろ。あく。や。廻。を。吹。ふ。ハ。姑。措。く。汗。溼。の。病。人。う。清。淨。あ。ん。の。汗。溼。の。病。苦。う。物。き。み。く。ん。あ。を。よ。い。あ。あ。ご。醫。一。つ。り。あ。く。嫌。厭。の。意。あ。く。バ。ヒ。と。拋。躡。と。措。大。丈。丈。と。以。角。の。絆。役。と。事。考。よ。い。や。と。え。ら。と。事。考。よ。う。の。も。と。因。ひ。又。廣。人。り。官。を。得。と。貴。人。ふ。も。教。さ。り。と。ハ。壯。業。が。う。棄。ん。う。良。相。比。す。棄。ま。ト。や。絆。役。と。驅。ら。と。呼。の。過。言。ハ。脣。と。と。て。飲。食。胃。と。胃。の。細。只。よ。う。但。腸。を通。其。傷。本。こ。え。す。口。了。傷。長。と。或。よ。五。丈。も。あ。る。の。あ。ひ。と。腸。膜。附。着。其。膜。紙。や。う。筋。と。あ。く。と。れ。と。筋。膜。の。筋。の。細。く。實。と。蓮。葉。の。細。絡。の。ど。と。教。す。百。派。道。あ。て。之。波。方。あ。ら。ぐ。絲。の。ど。と。筋。膜。の。細。複。ふ。と。其。

細管中水液流通す「アーテル」管す事前後もやうに廻門と名附
シハシ一枚のもの面より水液別を主とし理がある所下のにもあらぬも
が太條の腸より揚げ置きを散裂をれども溢別と云ふの体ハ更ニ安
一且膀胱の囊皮甚多くて之を強密たる皮あり才く外より水を
あむべからず中トヨラ水を経て出る事の多きも外へ入る後性
トヨリ第一なう天皇御製賜寶が膀胱の役めを命じ以中より氣
乃ぬける様なる膀胱の役應を敷き居此酒をあと西洋よりバニドと
名附人身中方々身多くは世のバニドハ膀胱上底大より下口細く
管も端をどうと屈曲せばおのずかみとて位置を失ひん

を正しくせんための造化の器と謂ひ医書中小水利の人又
卷腰法とく腰中へ氣を容て通下させあるハ腰中へ条にて通下さ
せりと此「バニド」よりして火氣蒸氣を膀胱又透徹させ陽氣入る
く小便利とす事なると石傷は何んて是え以非邪。バニド基底膜なれ
ども氣の通じを失ひ。膀胱の下に一鹹水の堅固せる石の如
きの塞がり小便通せざるを緩石膀胱痛の症たり。膀胱部位り
むかう。小水通下せざるを忘るが故に尿利を失ひ通下
れども此時「カティテル」より色々と弱窓へまつてあはうひ乃ハ快
通する事なれば前年以降てよき人送る人あら和蘭のあとすこゝも遠
申す。

轉脅法語

一 轉脅ハ男まゝ婦人トドン者此病論承友左スミヤシ

婦人轉脅の病膀胱の下口マツコト度マツコト小便を閉塞ヘイセイ此患マツコトをなすうと申

後チ衆人雷同マツコト一派マツコトあらうる前語マツコト申せマツコト通マツコト膀胱ハよ邊マツコトバニ

ドマツコト釣マツコトまくマツコトなまきマツコトバマツコト度翻正マツコトもろ物マツコト又逃マツコトと見マツコト下口マツコト弱口マツコト

まマツコトの間男人マツコト長マツコト女子マツコトハ其マツコト事マツコト傳マツコト也マツコト短マツコトもあえりマツコトハ漏マツコト意マツコトの障礙マツコトと

女マツコト又マツコトかた見マツコト也マツコト此轉脅の病マツコト度度マツコト又自マツコトく以マツコト膀胱の間マツコト小官能マツコト

もマツコト煩マツコト竟マツコト又マツコト膀胱マツコト推廻マツコトもマツコト臨月マツコトの時マツコト又マツコト小便マツコトもマツコト引マツコトみマツコト來マツコト

併マツコトこれ全マツコトくは宮マツコト又マツコトこれマツコト腰マツコトの時マツコト又マツコト小便マツコトもマツコト引マツコトみマツコト來マツコト也マツコト

の腰マツコト膀胱マツコトの中マツコト縫マツコトるがマツコト激マツコト烈マツコトでマツコトそれマツコトがマツコト強マツコト烈マツコトてマツコト腰マツコトをマツコト打マツコトし

ひまひや車マツコト葉マツコト假マツコト身マツコトハ金マツコトうひマツコト附マツコトカテイテルマツコトもマツコト瘡マツコトトマツコトハ端マツコト

ノマツコト僻マツコト擇マツコトく小水通マツコト行マツコトりマツコト被マツコトわ敷マツコト以マツコト結マツコト石痛マツコトをマツコト止マツコトむ行マツコトの事マツコト

く通マツコト小便マツコトもマツコト燒氣マツコト交マツコトもマツコト血マツコトと腎マツコトもマツコト腰マツコトもマツコト腎マツコト也マツコト

一種マツコトの小砂石マツコトの如マツコトくお腰マツコト中マツコトあるマツコトと膀胱マツコトもマツコト行マツコト石生マツコトりマツコト也マツコト

腰マツコト痛マツコトもマツコト膀胱マツコトの根マツコト也マツコトを石淋マツコトりマツコト也マツコト腰マツコト圓マツコト一

也マツコト巴マツコトの根マツコトもマツコト腰マツコト圓マツコト一マツコト也マツコト腰マツコト圓マツコト一マツコト也マツコト

くマツコト小便マツコト中マツコト小砂石マツコトのもマツコトとマツコトもマツコトけマツコトあマツコトそマツコトり腰マツコト底マツコトもマツコト腰マツコト秋マツコトと

やマツコトお石マツコトもマツコトとマツコトもマツコト取マツコト粉マツコト石マツコトのどマツコトとマツコトゆ名マツコト付マツコトゆ勿論マツコト公室マツコトの石マツコト

アマツコト臓マツコト月マツコト中マツコト細絡マツコト中マツコト通マツコトもマツコトハ無マツコトシカテイテルマツコト羅甸語マツコトハイルマツコトハ測マツコト及マツコト

エマツコトブラースマツコトヘイルマツコトテルマツコトブマツコトラースマツコトハ膀胱マツコトの車マツコトヘイルマツコトテルマツコトハ測マツコト及マツコト

口小朝霞集

卷之二

八

井之二

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百一

一百二

一百三

一百四

一百五

一百六

一百七

一百八

一百九

一百十

一百十一

一百十二

一百十三

一百十四

一百十五

一百十六

一百十七

一百十八

一百十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

一百二十九

一百三十

一百三十一

一百三十二

一百三十三

一百三十四

一百三十五

一百三十六

一百三十七

一百三十八

一百三十九

一百四十

一百四十一

一百四十二

一百四十三

一百四十四

一百四十五

一百四十六

一百四十七

一百四十八

一百四十九

一百五十

一百五十一

一百五十二

一百五十三

一百五十四

一百五十五

一百五十六

一百五十七

一百五十八

一百五十九

一百六十

一百六十一

一百六十二

一百六十三

一百六十四

一百六十五

一百六十六

一百六十七

一百六十八

一百六十九

一百七十

一百七十一

あ膀胱水を測る事ある事ありよ

膀胱用ある候 附養痘の語 大キリールの語

一 膀胱の用をなす事ハ其書多く寓同仕はある人より膀胱ハ母胎である
ありと用をかくは益以事を無役乃をうなぐとゆひいづきよお

たゞひてアリル

膀胱の母胎ある用をかく事利ある事又後きこれあるとバ贅トロモ守り
有益よろして生涯用ある事又其事も固らニシテ此通うれ遠事より
胃の下口 十二指腸と下処のオーフラの蓋深入る事多々膀胱をひく化並
併て膀胱括約筋とハ膀胱泄蓋とも之竅よろ出る事多々うふ又入られ
食ぬと消化とも大用の汗多く汗出血中敗支いりハ黄疸病

を發し奉西洋の後あるひ漢人を此黃病膀胱の所為と申徳書且復出
しやまざす後毛角又木馬の醫古のとみく坐馬一馬場余武くやしハあい
つさうの事哉つとぬぞ情もむごトお黄疸病汁よう歎ますと申鼻
乃ぞ之れ坐事氣を擋みなひ不癥瘕の言多くも便とひ是ハ膀胱の外
胆も通じて其胆のまの肉を省治右傍の旦のま病心冠又屬けく
痼ハ膀胱から事を示するあからどや痔の言時乃山を省冗度のま役の
手篇をまづとくと同省たる者くともなひ也序から膀胱汁食と消化を
了にてつけて究理りつゝとく熊膽其外諸獸膽腹痛を瘧も事原朱脣
痛と申ハ腸痛むとく腸の中又消化口又食がつと燥屎腸の裏を拒み
ゆバ腸又着索ひある件經娶奉りつゝ痛ナ又ひあきハ膀胱の運用甲斐

なれにあひしがれよ齒まで獸類の膽の氣を假りて彼塊物を潤化され
ハ神蹟の緊もゆゑて痛ハ愈る事となりれ中後腰は後發大苦味
了まのれあき死累とする事となば野猪豚猪膽も然膽より亞どく小効あ
る事にて猪膽導する理會てきひのぼき食塊みもせよ燥屎みもせ
よ膽汁能く消化をすり切あらむなり○蜜導の事能くもむる法又
ひ是も食塙とす一加へバ蜜の固まる宜能がそれより蜜を肛門へ
射ひて若を送ア射蜜若「スホイト」とりアされまく射あむ方捷徑又
猶太薬送硝とはトテ法薦け右の是あく射あひバ至勝トテト上
ノ折之不患過ノ剣モ効モ成モ幸惆トテ湯薑を飲ミトモ固ド理又
てひ病かうとも其薑能く選擇水此導法西洋ヨリスルル此導法西洋ヨリスルル

○坐薦と婦人臓中、萬城納と清仲累氏も以爲了。西洋多く此坐
萬種く事一是ハ瓜蒂也。數々とよく吐きする事
と有是あぐいとて吐きまことにハ波えむひとて思ふものども
沈漫などの水を下へぬく煩惱又水をもどす水を犯すや同一云ふが
あれ又も浣腸法乃理をうそりや作の膽汁と「大キリイル」汁とお食し
食を消化する事語安逸すかよアソコス然るに先年一癪を解体せ
此會と巡査くひナニ指揚沖とこの方々膽汁を吹ぐくだ體の竈
ええそれより一すま件下もの方々「キリイル」汁を沃ぐ竈あると親以夫
まを十二指腸冲にて相會と云ひあり異物又は用を成さと固ドお食
あく後置と取密多と小差あるのもよし教多歎歎を安樂ノ報以之

謝るに理ともれどもひきと體のなれ難がまくあらざれある體
乃役員を肝膽^{えんぱう}より勤むは肝膽たま候^{まう}とりの隣人の役も承け
里肝膽^{えんえん}より右み候^{まわ}てあり徳歎^{とくかん}最ももあらずさて取密候^{とみ}をばつ事
又拘^{くわ}りてうゞ某の猶^{ゆう}を某の用^よと爲^す某の路^じハ某の用^よあるとする
と觀^{くわ}るを爲^す某の事^{こと}一處^{かず}桂鬼^{けいき}の血^け猿^{さる}など觀^{くわ}るもじを理^りとてあら

健胃剤の法

西洋醫効もそれべ別健胃とて喝之は便愈りすタナカモ
トキ年老科も稍行ひきから此後接觸婆モ内喝えひ捨ニ
お亦お健胃剤モ之接觸なれ候最一と改を施ス及シ左括
又効能ある事あ

おの初づく置郵うちも述ゆるは是あり一徳あるべし名傷半
童の時もハ被殺女難を經りテ是風営全家よびては早は一千
年來ハ裏店の四女車也常より行ひたる事無是親お乃流
行も多がよひ茶科も行ひと行ひ流り後ど承用代もめ腐敗流を
じ往りひきてはやひ泊ま郎底野加もと今ハ穩婆女も用ひて教む
と向てひききて極度の事行ね冒すとトとせひ能あら候
彼土極度者極佛の樹木葉を仰いだる健胃散おなう石像顧
えね寝う擣皮筋穗齒などとぬる擣毬彼女み断えめがお用ひ
術をすアシテは窮屈の苦勞也馬とお傳へタゞ世不をもく取つてお
かうと額をさう柄林九臘より禪密五音あはれ等の事

質へこれより弛緩ラクハでも其不全はカドリムに近いがおもやくくらる傷
風寒より邪氣カニの薬健胃ケイガイのあくとあれり利氣リキのあく茎葉
子白蘿ハナワラ子瞿麥クルマツ子芥管カイカン子地膚蕪ジフウ青菜セイザイ菔子ブロコリを細辛
此數其効稍近カタヤラともして可カシハ同理ドウリとなり薬物のう根是等の
理を改めと思ひますより一粒水充理スイリあべくは

蟲虧ムカシ腸ツバメ乃活

一大腸の右邊ヨヘン又肉看スジヤクセモムカムト點鴟增セハシアホムカハシ成きのれ右附ミツツクひとなり人

小腸コウショウ大オホ小コトコト小腸コウショウよりも太く長さハサカ五寸ゴチすもあるあ一贅ツヅクお

て毛アシやあくんアシと較シテヒリ和榮臂ハラシの後アフタ脇アシ與母脇アシ是在アリの胸乳廉脇ヒツルケンアシ
兜アシノ腋帶アシトヨウ傍アシの脇アシ中アシのアキマツアキマツ生アシシテモ濱アシ脇アシ中アシに滿アシ若アシ也
大極十角アシカタの酒アシちアシの腸アシ中アシを更充アシシテモハ事アシナアシのそれよナアシニテ
月アシも月経アシアシ胎アシ中アシ持アシるのあアシ財財アシを膾アシ滯アシ腸アシ中アシよあアシイ申アシか
之アシ財財アシの腸アシ瀉アシを入アシ及アシがアシめ事アシのアアシ月アシもアアシて生アシ外アシ界アシと被アシた
歲アシ長アシノ後アシ蟲アシ腸アシ事アシへアシかアシあアシかアシあアシ消アシすアシ教アシ養アシすアシあアシきアシるを
ある。ブランカルジアシ乃事アシ人アシ工アシ痛アシ人アシを治アシ一アシ其アシ數アシ月アシ元アシ入アシ冷アシ氣アシ一アシ年アシ
糞アシ中アシトヨウ即アシハギアシノ後アシ設アシあアシてモ底アシ底アシ解アシ剖アシセアシ次アシ虫アシ腸アシ又アシ至アシ多アシ有アシあ
アアシレアシ即アシトヨウ即アシハギアシノ後アシ巴アシ冷アシ氣アシセアシ底アシ日アシの蟲アシ中アシヘモアアシト
虫アシ腸アシ又アシ淹アシ菌アシセアシ底アシのとアアシモアアシトヨウ即アシモアアシのアアシ骨アシ骨アシ筋アシ筋アシの

冷せりまつ月を経て後ひままであくらめかう不癒。瘡痏乃
瘡人よりちり剥き去り大便ハ下利をもとす。無やれりも。蟲モリ
事まく薬用く服後は七八條の蟲をとりまつて是難易の剝の腸
を通じきる間をむし。腸は滑毛。居てもろも思つてもその痛
ハ多く。時痛がる。もがく。痛体にて。二三日ももく。痛むと。種々体
体あり。卅休止むとり。時も甚傷よ入る。滑毛。ももゆるともな。腰肉出
よ。似まくあらざれ。これ獨世。腸の虫をもて。名前も。まこと。形容のこな。す蟲
蛇形。滑毛。ももゆる。もかく。ざ葉も。か枝の形。ももゆる。ま
まうざれ。も傷が。まこと。事哉。あらかまぐれ。

和蘭醫書卷之上終

